

朴章鉉における民族儒教と「神道」把握

Park Jang-Heon's View of Shinto and Korean Confucianism

小林 寛

(Hiroshi KOBAYASHI)

キーワード：民族儒教・国家の宗祀・神廟

key words : Korean Confucianism, National Rite, Shrine

はじめに

近代東アジアにおいては、変法運動の思想家など日本の明治維新を参考にして伝統の再構成をはかる思想家がある⁽¹⁾。本稿においては朴章鉉の「神道」把握の特徴を伝統意識の側面から明らかにしておきたい。朴章鉉は民族の自立を考え民族固有の儒教を打ち立てようとし、日本の盛国になった理由が日本儒学の再構成にあると考えて日本に遊学し、漢学者を中心に交流し、神道に関する記述も残している。政治変革の中で整備された「礼」たる「新興国の新法」として神道祭儀を理解している。明治以降、行政的には「国家の宗祀」として、神道は宗教ではないとされていて、東アジアの思想家のこうした見方を助長する面があった。明治維新の経過を記述した康有為

や黄遵憲らの著作による影響もある⁽²⁾。「近代」の日本における行政的に宗教を越え神社参拝によって民族を越え出る面を持つ神道については、日本に渡り日本人士と直接に交流する思想家は、国家形成の国民の紐帯としての儀礼の役割に注目して政治的・社会的な論評をしている。それは必ずしも宗教的評価を意味しないとき、思想家の宗教観もこれに伴って明らかにされる必要がある。朴章鉉は、明治維新を参考にして民族の自立を図り民族儒教を樹立しようとしていた思想家であって、この面から日本の漢学の動向に注目し、康有為の大同思想に論及している。康有為は天下がひとつになる「大同」の世の到来を考えており、大同世に至るには三世説⁽³⁾によって段階を踏まねばならないとして、大同に至るための前段階を確立するための

こばやしひろし：外国語学部アジア語学科教授

「小康」の時代としての立憲君主制による皇帝政治を考えていた。朴章鉉も民族の自立をいいながら、理想としては将来の「大同」の世を語り、この面では康有為の思想的影響下にあるということができ

一 朴章鉉の思想的立場

朴章鉉（一九〇八—一九四〇）は「日韓併合」⁽⁴⁾の二年前に生を受け、第二次大戦の終戦⁽⁵⁾五年前に亡くなり、その生涯を戦前の日本の政治的影響下に過ごした。朴章鉉の研究は一九八〇年代に始まり、全集である『中山全書』が一九八三年に刊行されている。一九八〇年代の朴章鉉研究は琴章泰『近百年儒学史』に始まる。『中山全書』の刊行もこの流れに沿って行われる。⁽⁶⁾こうした研究によって韓国においては朴章鉉を主として民族儒教の確立者として分類している。⁽⁷⁾一九九四年には琴章泰外『中山朴章鉉研究』が刊行されている。⁽⁸⁾朴章鉉の略歴については『中山全書』「付録年譜」がある。今ここに掲げておきたい。⁽⁹⁾

一九〇八年戊申九月十日、清道水也里の第に生る。八歳、學を伯父の後岡公より受く。十四歳辛酉、私立普成學院普通科入學。一六歳癸亥、夫人載寧李氏を聘る。一八歳乙丑、普成學院普通科卒業。○深齋曹兢燮先生従り學を修む。一九歳炳寅、學を修む。二十歳丁卯、學を修む。二十一歳戊辰、學を修む。○女永樂生る。二十二歳己巳、學を修む。二十三歳庚午、學を修む。二

十四歳辛未、學を修む。○大宅自り分家す。二十五歳壬申、『三經隨錄』三卷を撰す。○恭山宋浚弼・醇齋金在華を歴訪す。○子永錫生る。二十六歳癸酉、二月『漢京行』を作る。李玄山を大田に訪ぬ。上京し、老宿諸儒を歴訪す。四月、明教學院に入る。九月、業を畢ぬ。十月、昌寧・昌原・馬山・咸安・晋州・丹溪・三嘉・玄風等の地由り、十一月、家に歸る。二十七歳甲戌四月、二十八歳乙亥、『弊傳』を著し畢り、世に刊行す。二十九歳丙子、『海東春秋』及び『四書類集』を著し畢ぬ。三十歳丁丑、『海東春秋』序文『東西現勢論』序文を作る。及び『文卿筆帖』『野史』等を編み畢ぬ。○文化堂を郷里に建て、堂規を立て科業を定め、弟子族人孟鉉・炳鉉・永東及び李秉馴・李秉華等の諸人に教ふ。○子の永錫生る。三十一歳戊寅、『半島書經』を著す。及び『瓊章帖』等を編み畢ぬ。三十二歳己卯二月、日本に渡り、東京に至り學界の諸名士と撮影し詠詩す。二松學舎山田準學長の歡諭に因りて二松學舎專門學校に入學す。○『文卿草詩文錄』五卷『書牘』三卷を著し畢ぬ。○十一月、病を以て二松學舎專門學校を退き、國に歸る。三十三歳庚申四月十五日、竟に病を以て没す。

これによれば、朴章鉉は八歳に伯父の後岡公に學を受け始めてより書堂の教育の中に朱子學を深く修得している。さらに朱子學にとどまらず、むしろ独自の經書の編纂に尽力した。朴章鉉が『海東春秋』『半島書經』を著したのは東京を訪ねる以前であって、民族儒教の確

立の方向を模索するなかで、日本の漢学者を訪ねて、自らの学の方
向を確認しようとしていると見られる。

朴章鉉の思想的特徴は民族的儒教を確立したところにあるとされ
る^⑩。大韓帝国の成立から第二次大戦の時期について、半島地域の儒
教模索には大別して次の五つの動きがあげられる^⑪。①道学派の儒教
改革、②愛国啓蒙思想家の儒教改革、③心学派の儒教改革、④今文
経学派の儒教改革、⑤経学の民族的再構成の五つで、朴章鉉はこの
うちの⑤に分類されている。むしろ朴章鉉がいてこの項目がたてら
れている。海東の民族の自立を求め経典を海東の事蹟で記述して新
たな経典を編纂する所には近代的な民族意識による自立の立場を見
ることが出来る。経書には堯舜禹といった上古の聖王や夏殷周とい
った三代の事蹟が記されている。朴章鉉はこれを海東の王や偉人の
事蹟で置き換えて半島のための経書を編纂する。

二 朴章鉉の日本評価

民族儒教の樹立を企図した朴章鉉は日本へ遊学することによつ
て、日本が隆盛している理由を日本の漢学に見出そうとしている。
朴章鉉の日本評価については『詠日本史』『日本略史』に明確に表れ
ている^⑫。『詠日本史』は日本史の中から十二の題材をとりあげて説明
しその題材を主題とする漢詩を詠する漢詩集となっている。『詠日
本史』は『文卿常草』初「詩」に収められており、文よりも詩に力
点がおかれている。『日本略史』は日本史を略述する主旨で記述され
ており、天皇の順を追って事蹟が整理されていて、『文卿常草』「四」

文録巻七に収められている。『詠日本史』が詩集であるのに対し、
『日本略史』は文集となっている。この両者は文章そのものが重なる
点が多く、『詠日本史』の方が事蹟・文ともにより精選されている。
『日本略史』は文であるため題がなく、天皇に政権のあるときは日本
史を良いものとして評価して記述し、武家に政権、政治力のあると
きは日本の混乱を記述している。混乱の時期に忠臣があつて命を觀
して天皇を守ることが描かれる。その主眼は総論に表れている。す
なわち日本には天照大神より始まる萬世一系の皇統があり、民はそ
の支流であること、そして国民の性質が忠勇であつて邦家のために
殉ぜんとすることが述べられている。朴章鉉は皇統があることのみ
を評価しているのではなく、国民が邦家を守ろうとすることを記述
する。こうして朴章鉉においては、天皇の治が日本の国民にとって
望ましく、対比的に武家政権が望ましくないとされている^⑬。天皇の
治は基業の徳をもって民を王化し安平にするものであり、また典礼
を制し学校を興して、文物憲章を燦然と一新し、律令による行政で
国家を太平にするものであると考えられている。武力による霸道よ
りも、儒学の考え方からする文化による徳治に重きがおかれ至治が
述べられる。朴章鉉は日本史の中に、日本の天皇の文治の徳を見出
し、さらに、王徳は国民によつても支えられ、和氣清麻呂が道鏡を
退け、菅原道真が藤原氏の恣権に反し、楠公が北條氏の専横を退け
足利氏に抗したことを評価していて、王家のみでなく臣下あつての
政治であり、民衆あつての国家であるとしている。

三 日本と神道

東アジアの思想家のなかで、朝鮮⁽¹⁵⁾の神道に関する観点をとりあげるとき、朴章鉉は日本が王政復古を掲げて完成した明治の変革の近代国家樹立のための政策の意図の下に日本の伝統が再編され整備されたものとして、神道を見ている。朝鮮の伝統的儒者達が身を蔵して河清を俟つ思いから伝統的な書堂の教育に沈潜し、中には反日義兵の気運を養成するものもあり、日本とは関わりを持つとはしなかった朝鮮末期儒学から続く影響の中にあつて、朴章鉉は日本が強国になった理由を知ろうとし⁽¹⁶⁾、また二松学舎専門学校校長の山田準の勧めによつて遊学するなどして日本と関わりを有している。日本では例えば山田準・井上哲次郎・加藤梅四郎・小柳司氣太・奥忠彦・四宮憲章・岡彪村ら主として漢学者と面談し、書を往復するなどして、交流を有していた⁽¹⁷⁾。朴章鉉の神道および日本に関する記述を主として『中山全書』⁽¹⁸⁾から取り上げ、特に儒教祭式が神道式影響を受けていることの記述、日本史の評価、靖国神社の記述、高麗神社の記述等に注目しておきたい。朴章鉉が民族の自立を図っているという意味では、戦前の日本の朝鮮政策と朴章鉉の在り方とは対立する。しかし、日本と関わりを絶つて義兵闘争などの方法によって自立しようとしたのではなく、彼はむしろ日本に行き日本が強国になった理由を知りたいと考えて日本理解を進めている。このことは次の記述に表れている⁽¹⁹⁾。

日本はもとより、遠東の小國にして蹙みて群島に據る。地狭く

民貧しく、世界の大勢を談ずる者、道ふを屑しとせざる所と爲す。十九世紀中葉の明治の變法より歐美の精華を取り、故舊の糟糠を捨てて庶政を維新す。意を工商に注ぎ、外交を請求し、軍備を整頓し、國勢ここに於いて日に隆し。一たび清に戦勝し、臺澎を有し、再び俄に戦勝して我が朝鮮を併し、協定に加入、徳属の北太平洋諸島を代管して、移民し工商の業を航らす。其の勢力は更に、中國の満蒙、魯、長江流域に膨張し、南洋、澳州の諸地に及ぶ。其の軍備経済の力を憑み、内は亜東を凌ぎ、外は大洋を瞰い、太平洋を雄霸して小かに英美をうかがと欲す。

ここでは日本が強くなった理由として明治の変法・維新がその要因として大きいと見ている。王道に注目して国が隆盛する所以を探ろうとする点は彼が儒者である事に起因する。このことは『日本略記』『詠日本史』の文意からも明らかになっている⁽²⁰⁾。日本史について述べた『詠日本史』十二首の詩のうち、天皇の徳治について述べたものが三首、神器についてのものが一首、天皇を補弼する忠臣に関わるものが三首、天皇を補佐する漢学を伝えた王仁が一首、武家政権の政治の混乱をいうものが四首あつて、朴章鉉の日本史の評価は王道を認め王道を補弼する臣民の道を評価している。これに対し、鎌倉時代・室町時代・徳川時代などの武家政権については実質の治世の安平を認めるとしても積極的な評価を与えてはいない。朴章鉉は明治になって天皇中心に政治体制が再編されたことを評価している。

四 神道に関する記述

『中山全書』の日本に関するまとまった記述には『東京遊記未定草』『日本略記』『詠日本史』『書牘』等がある。そのほか詩文集にも日本に関する人物との交流や事物についての記述が見られる。朴章鉉は儒者であつたために日本に関しても儒教関連の記述が多い。この中でも神道に関連した部分は儒者としての観点からなされる。以下には神社に関する詩文四例をみておくこととしたい。まず、儒教祭祀と関わって湯島の聖堂に関する記事を確認しておきたい。⁽²¹⁾

(四月)二十二日日曜日、湯島聖堂に第三十三回孔子の祭典有りて、午前九時開式す。

祭典の次第。

参拝せざるもの着席す。〔會客及び學生数百人なり。〕

來賓着席す。〔内閣總理大臣以下数十人なり。〕

祭主祭官伶人著席す。〔祭主は是れ徳川家達⁽²²⁾にして、祭官十餘人率るは、皆年少の伶人四五人なり。〕

總務挨拶。〔挨拶する者は聖堂に敬拝す。〕

修祓。〔始めに祝文を読む。修祓は一人、青葉の木⁽²³⁾の掛けを執りて低剪する者、先に來賓に向ひ之を三揮すれば、則ち祓を受ける者は起て之を拝す。又た参拝者に向ひて亦た之の如し。又た學生に向ひ亦た之の如し。〕

開扉・奏樂。〔伶人は皆、其の服を服し、其の冠を冠す。〕
警蹕。〔一同起立す。〕

奠幣。〔徳川公出席して殿内に在り。而れども老病にて執行すること能はず、代人之を行ふ。幣を箱に咸して神像の位の前に獻ず。〕(以下略)

ここでは湯島聖堂における孔子祭の式次第が儒教式でないことに着目していることがわかる。朴章鉉は神道から影響を受けて整備されている儒教祭祀を順に詳細に記している。このことに関わって、二松学舎で行われた儒教祭祀の祭式について朴章鉉は次のように書く。⁽²³⁾

十三日、山田先生に就いて祭儀の古典との差點を問ふ。曰く「聖像右に在り、乃ち以て『西を上と爲す』の説に違ふこと無からんや」と。曰く「設所を陳ぶるに右に在るは是れ便に従ふが故にして、坐次の尊卑無きなり」と。曰く「聖像と神位と並列するは則ち是れ列享なるや配享なるや。中州を以て聖像を列するは則ち不可なること無からんや」と。曰く「是れ合享にして所謂列と配との義無きなり」と。曰く「三獻は是れ支那の禮にして日本式に非ざるなり。日本は是れ神式なり。祭儀は須く我國我家の禮に従ふべきのみ。何ぞ必ずしも法定式有らん。凡そ新進新興の國は宜しく新法有り。古に拘はり古に泥はる是れ國を滅ぼし家を滅ぼすなり。今孔子の祭典は悉く日本の新式に従ふ。今昔の積典、積業に非ず」と云ふ。祭羞は則ち果品一器(三四品)有り、生餅一器あり、魚一尾有り、酒一瓶有り、玄

水及び塩一器有るのみ。焚香無し。降神の節に榊木を以て修祓するは此の義有るに似たるなり。

ここには孔子の聖像に対する祭式が神道的祭式で行われていることへの朴章鉉の山田準への疑問が記されている。この疑問に対して山田の答えは「凡そ新進新興の國には宜しく新法有るべし」というものであった。古に拘泥するのは國を亡ぼすことにもなるとの言は朴章鉉にとって『東京遊記未定草』に記録されるべきものであった。二松學舎の創立者「故中洲先生の二十周忌」が五月十二日に行われ、教室を臨時祭場としたときのことを表していて、祭儀の疑問について山田学長に尋ねた記述がこれに当たる。⁽²⁴⁾ 儒教の祭式は日本では神道式の影響を受けて行われている。時代に即応する祭式を新法と捉える日本を代表する漢学者の言葉に朴章鉉は注目している。靖国神社については、詩文には次のようにある。⁽²⁵⁾

「九段坂上、靖国神社大祭に感有り。」

皇都穆々として四門開く。

瞻仰す、金輿・萬乗の回るを。

遙かに知る、千萬の忠臣の魄、

告げて天皇の祭祀を享け来る。

靖国神社の大祭の様子に感じた詩句では千萬の忠臣の魄が天皇の祭祀を享けるというのであるから忠臣に焦点がある。「穆々」とは奥ゆ

かしく静かであうやうやしい様で、大祭であっても厳肅な祭儀のようすを詠んでいる。「忠臣」という言葉に天皇を中心とする王道を支える人々を評価していることがわかる。和歌山県の竈山神社についての感慨は、次のように記している。⁽²⁶⁾

「日本和歌山縣竈山神社、徳川伯爵の原韻に次す。」

討伐多年賊弓に傷つけらる。

煌々たる神社青空を挿す。

當時の壮勇、遺勳の跡、

能く臣民をして萬世崇めしむ。

ここにいる竈山神社は和歌山県和歌山市和田に位置し、彦五瀬命を祭神として祀る。神武天皇および椎根津彦命が配祀されている。彦五瀬の命は神武天皇の長兄で、東征に参加し、孔舎衛坂の戦いで長髓彦軍の流れ矢に当たり、それがもとで紀伊の竈山に至ったとき没したと伝えられる。社殿の北側には彦五瀬命の墓と伝えられる古墳があり、『延喜式』では小社に列している。この時の社格は官幣大社（大正四年）であった。詩文中に詠まれているのは彦五瀬命の事蹟であることになる。この詩文においても「臣民」という言葉が用いられ、王道とともにある民衆が意識されている。こうして朴章鉉においては國を守る人々の意志について肯定的に評価をしていることが分かる。神社に関する記述として高麗神社の記述については以下のようにある。⁽²⁷⁾

「五月二十六日埼玉縣人間郡高麗村に如き高麗神社に謁ゆ。高麗神社の祭神は即ち我が邦高句麗の王族、名は若光にして、國亡ぶに際して其の部下を率て來り居り、今に至る。姓は高麗とは其の子孫爲ると云ふ。」

東京市外、栢森々たり。

武蔵の十里（埼玉は武蔵の國なり）、農業に宜し。

神社千年、福音を祈る（社建ちて已に千餘年と云ふ）。

相ひに雅會を討し、情、更に好し。

追て往蹟を思い、感猶深し。

今の如く参拝し、辭裏を陳ぶ。

若の英靈を悦し、此の心を照らす。

高句麗の王族が日本に来て神社に祀られている伝承に注目している。神社は決して日本人や日本の魂のみに限定されたものでなく、神道はその意味で日本に限定されたものとは一概にはいうことができないことを知る。こうして四例ある朴章鉉の神社に関する詩文を見ると、人間の性格を有した祭神について述べているということが言える。儒教でいうところの廟に相当する視点を持って神社を捉えているということが言えよう。

五 朴章鉉の信念

朴章鉉が『易経』による「神道設教」⁽²⁸⁾を述べ、また日本史につい

て王徳と忠臣とを評価するところからも、朴章鉉の信念の源泉を確認しておくことが必要になる。朴章鉉の信念は儒者としての天の思想に由来するもので、かつ康有為の大同思想からの影響も有している。大同について朴章鉉は次のように述べる⁽²⁹⁾。

大同とは何ぞ。其の同じからざる所を同じくして、一に歸す者なり。一とは何ぞ。人の人たる所以、國の國たる所以の道なり。是れ則ち所謂吾が教なり。吾が教即ち孔教なり。

世界が大同するとき、民族儒教たる海東儒教であっても、神道であっても、彼の信念からすれば、いずれは宗教・哲学が大同する時代を迎えることになる。大同の考え方は孔教運動に関わっている。朴章鉉は「吾が孔教」といい孔教を儒教とほぼ同置して論じていることがわかる。朴章鉉によれば王道は王のためにあるものではなく、民とともにあるもので、民があつてこそその王道であるとの位置づけがなされている。このことについては朴章鉉が『孟子』を主題ごとに分類して再構成した『孟子類集』において「民族」の項目をたてて論じるところにも表れている⁽³⁰⁾。朴章鉉は天が民族と自分に与えた使命があると考えており、儒教を再興して民族を自立させたいとの意識を有している。朴章鉉が自ら建てた書堂である文化堂の規則には「斯文の一脈を保つことを目的と為す」⁽³¹⁾と記しており、その背後には天に由来する信念が存している。「將に以て斯道の責を任じ、民族の命を擔ひて以て天の予を降す意に報ゆ。」⁽³²⁾と述べるところに、民

族と自分とを結びつける意識が現れている。王政復古の流れを受けて明治になって近代化する日本において、神道は天皇を中心とする王道が定め立てられたものと見ている。日本は永き伝統を有する国ではありながらも明治を迎えて王政復古したのであって「新興国には新法あり」という意識が日本の漢学にはあったことを記し、朴章鉉は国家の自立には民族の精神の紐帯があるべきであると考えている。日本の儒教祭式は神道祭式を融合した日本的儒教に変容している。それを見た朴章鉉は民族の儒教があつて良いことに自信を深めたであろう。朴章鉉が経書を書き直し民族の儒教経典を作成しようとしたことは、日本遊学の経験も大きな契機となっていることが理解される。

朴章鉉の神道理解は王道としての国民精神の紐帯としてであつて、その面から神道や神社が評価されている。例えば靖国神社や竈山神社の記述についても靖国神社や竈山神社を否定的にのみ述べるのではなく、むしろ「忠臣」「臣民」と言い、日本の天皇を支える民衆に注目し評価していることがその詩文の文意に明らかになっている。それは朴章鉉が半島の民族の日本化を歓迎していたということではなく、民族が自立するために王道を輔け、王道の実現のために命を投げ出す国民の存在を評価しているということを意味する。

天の予を降す所以の者は豈に生民の爲に非ざるや。豈に大道の爲に非ざるや。生民の爲に公なり。大道の爲に公なり。則ち然るに、予は天下の公民の爲にするなり。⁽³³⁾

朴章鉉は儒者として「天」に信念の源泉を有していて、自身と民族には、天命があると考えている。海東の民族がアジアの歴史の中で命脈を保って続いている天命があり、民族の持続に天命があるとすれば、天の意志が歴史に内包されていてこれを明らかにすることが可能で、民族に附せられた天命を明記する経書があつておかしくないという考え方にたつて経書が編纂される。朴章鉉は民族の自立を志向し、民族の儒教である海東の儒教を打ち立てようとしている。朴章鉉は、生民のために、大道のために「公」とであると言う。政治は生民と大道のためにあり、私されるものではないと考えている。大道とは儒道に他ならず、その面で、王家や皇家は生民のための「徳」を有する限り是とされる。朴章鉉は『旧史学論』で民族の史学の病んでいる理由の一つとして次のように言う。

二に曰く朝家有るを知りて民間有るを知らずと。⁽³⁴⁾

民族の歴史学は今まで王家の家系があることのみを知つて民間があることを知らなかったと言う。ここに彼が忠臣や民に注目する理由の一端が表れている。朴章鉉が日本史に見出すのは、儒道の理想にかなう徳治と、臣下と生民の邦家への忠勇であつた。

おわりに

以上、本稿では朴章鉉の思想的立場、日本評価、神道観、宗教的立

脚点の四点から述べてきた。朴章鉉は近代の日本において「国家の宗祀」として整備された神道祭儀を「新興国の新法」と理解する。朴章鉉は日本と交流を有し、その上で神道に関する記述も残している。朴章鉉が神道に関する記述をなしていることは思想形成において日本の明治維新以来の体制を参考にしたことと深い関係があり、神道は宗教としてよりも、国家儀礼としての面で国家の統合を進め、民心をひとつにする、祭儀の役割の面から評価されることがわかる。神社そのものについての把握は、儒教的な廟の概念から把握されていて、神霊とは言いながら人魂の側面で理解されている。日本の側も神道を「国家の宗祀」と位置づけていたのであって、日本側の神道に関する位置づけが朴章鉉の見方を助長する面があった。朴章鉉の日本に関する記述には『東京遊記未定草』『日本略記』『詠日本史』等がある。そのほか詩文集にも日本に関する人物との交流や事物についての記述が見られる。朴章鉉も康有為の「大同」の思想の影響を受けていて、「大同」「太平」を語る。国と民族の自立と富強を願いつつ、未来には大同する時代を見据えている。朴章鉉は民族儒教の確立に力を注ぎ、海東の民族の自立を求め經典を海東の事蹟で記述して新たな經典を編纂する。それは「大同」に至る前段階の「升平」の時代の完成をめざすものでもあった。「升平」の時代の完成は立憲君主制の確立によるとされる。³⁵⁾しかし単に王権の側に立つてのみ明治維新を評価するのではなくして君主と民衆とが交通し、国がひとつになることを志向する。朴章鉉は海東の独立を志向しそのための民族儒教となえていて、これまでの朝鮮の儒教は王

があるのみで民衆があることを知らなかったと反省する。彼は日本が強国になった理由として明治の王道の確立がその要因として大きいと見る。このことは『日本略記』『詠日本史』の文意に表れていて、日本史について述べた『詠日本史』では王道を認め王道を補弼する臣民の道を評価していて、鎌倉・室町・徳川の武家政権について実質の治世の安平を認めながらも積極的な評価を与えてはいない。朴章鉉は民族を意識する過程で未来の「大同」をいう。民族に着目することは他民族との彼我の違いに着目することであって、彼我の違いを言うことは、同じである状態を見据えて語ることと等しい。

朴章鉉には日本が強盛な国になった原因を知ろうという動機があつて、ここから日本の制度の在り方に着目している。朴章鉉は王道確立と民族精神の集結とを評価している。朴章鉉は二松学舎専門学校学長の山田準の勧めによって日本に遊学し、主として漢学者と面談し、書を往復するなどして、交流を有していた。神道祭式の面では、儒者としての観点からなされている。湯島聖堂における孔子祭の式次第は神道から影響を受けた儒教式でない祭祀がなされていることに朴章鉉は着目して、祭式を順に詳細に記述して述べている。儒教祭式が神道的祭式で行われていて、日本の「凡そ新進新興の國には宜しく新法有るべし」という考えを記述する。時代に応ずる祭式を新法と捉える漢学者の言葉に注目している。

神社の祭神の面では、朴章鉉においては、靖国神社を詠んでいる詩には「忠臣」という言葉で天皇を中心とする王道を支える民衆を評価し、和歌山県の竈山神社について「臣民」という言葉で王道と

ともにある民衆が意識され、国を守る人々の意志を肯定的に評価して、高麗神社の記述では高句麗の王族が日本に来て神社に祀られていることに注目している。朴章鉉の神社に関する詩文を見ると、神社について国家につくし、または時代を代表する人間の神霊が祀られた神社に注目している。地上に降臨させた「天」を認めつつも、神道は、君主制を維持する礼たる祭儀として理解され、国民精神の紐帯として評価されていて、儒者として、君主制と儒教文化の維持を重視し、徳による治を評価し、民族の自立と富強のために君主を補佐する臣下と、王道の実現のために尽くす国民の存在を評価している。自己の内面の宗教的信念の面については、朴章鉉は天が自らに使命を与えており、儒教を再興して民族を自立させる役割があると自ら任じており、そのための学を確立したいとの強い意識を有している。日本の神道を自己の信念たる儒教の世界観の中に位置づけて理解している。

【注】

- (1) 康有為には『日本変政考』『日本書目誌』等の著作があり、日本の変法を参考にしようとしている。康有為の「神道」評価については、拙稿「康有為における『神道』把握」つくば国際大学『研究紀要』第13号を参照されたい。
- (2) 康有為には『日本書目誌』があり、日本で刊行された書籍の目録を記している。澎澤周『中国の近代化と明治維新』同朋社一九七六年86頁を参照されたい。
- (3) 三世説は何休の『春秋何氏解詁』に由来する。
- (4) 日本での呼称で、詳しくは『日韓併合』岩波新書を参照されたい。大韓民国では日本による「強占期」と呼ばれる。
- (5) 大韓民国では日本からの国権の収奪から解放されたという位置づけから「解放」と呼ばれる。
- (6) 琴章泰ソウル大学校教授は『中山全書』の編纂主任を務めている。
- (7) 琴章泰外『中山朴章鉉研究』民族文化社 一九九四年を参照されたい。
- (8) 中山全書刊行会『中山全書』保景文化社 一九八〇年678頁を参照されたい。
- (9) 『中山全書』678頁を参照されたい。
- (10) 琴章泰「儒教改革運動の研究」韓国史編纂委員会
- (11) 琴章泰「朴章鉉の 経学と歴史の民族主義的再構成」琴章泰外『中山朴章鉉研究』民族文化社11頁を参照されたい。
- (12) 朴章鉉自身は自身の書に海東または半島の名を冠している。
- (13) 『中山全書』一九八〇年を参照されたい。
- (14) 朴章鉉がこのような日本史を観るのは儒者であるが故の王道を評価する点に由来することが挙げられる。と同時に当時の日本の所謂、皇国史観による歴史記述からの影響が考えられる。このことについては機会を改めて論じたい。
- (15) 一九一〇年大韓帝国を「併合」して、日本では半島地域を「朝鮮」と呼ぶ。朴章鉉は「海東」「半島」と經典に題している。
- (16) 朴章鉉「東西現勢論」『中山全書』1168頁を参照されたい。ここには「日本帝国」についての情勢を記している。
- (17) 日本における活動は『東京遊記未定草』などに記されていて、この中に日本の学者との交流が記録されている。また人名録『師友名考』があり、交流した日本人の六四人の住所も記録されている。
- (18) 『中山全書』一九八〇年を参照されたい。
- (19) 「東西現勢論」『中山全書』1168頁を参照されたい。
- (20) 拙稿「朴章鉉『詠日本史』と『日本略史』との異同」つくば国際大学研究紀要』第9号を参照されたい。

- (21) 「東京遊記未定草」『中山全書』247頁を参照されたい。
- (22) 徳川家達一八六三～一九四〇
- (23) 「東京遊記未定草」『中山全書』251頁を参照されたい。
- (24) 「東京遊記未定草」『中山全書』251頁を参照されたい。
- (25) 『中山全書』277頁を参照されたい。
- (26) 『中山全書』275頁を参照されたい。
- (27) 『中山全書』277頁を参照されたい。
- (28) 朴章鉉は『易経』に関する注釈を残している。『三経随録』「周易」を参照されたい。
- (29) 「原大同」『中山全書』317頁を参照されたい。
- (30) 拙稿「朴章鉉『孟子類集』における民族」『つくば国際大学研究紀要』第9号99頁を参照されたい。
- (31) 「文化學堂規」『中山全書』342頁を参照されたい。
- (32) 『中山全書』309頁を参照されたい。
- (33) 『中山全書』309頁を参照されたい。
- (34) 『中山全書』341頁を参照されたい。
- (35) 坂出祥神『大同書』明德出版社一九七六年131頁を参照されたい。ここには三世説の発展段階が図示されている。

・本稿は「神道宗教学会（於國學院大學）」平成18年12月3日の発表をもとに作成した。